



有島記念館と地域社会 —地域と関わる学芸員の仕事—

ニセコ町立有島記念館・主任学芸員の伊藤大介さん（41）にお話をうかがった。近年、観光と結び付けられがちな博物館であるが、そこで働く「学芸員」の地域社会における役割を、伊藤さんの活動から探してみたい。

吉田 朋生

北海道大学大学院
文学院修士課程

地域の歴史への眼差し

「小学生の頃から北海道の歴史や鉄道が好きだった」と語る伊藤大介さん。学芸員を目指したきっかけは社会科見学で訪れた開拓記念館（現、北海道博物館）だ。展示室の一角にあった蒸気機関車の部品に目を奪われた。「北海道は、鉄道が伸びた先から発展していった歴史がある」。歴史と鉄道の両方を扱える学芸員を志すようになった。

大学院は、学芸員の資格が取れる北海道大学に進学し、博物館学を中心に学んだ。研究テーマは、博物館の来館者研究。各地の博物館を巡り、来館者調査で博物館を訪れる人々の考え方に触れた。

博士課程を休学し、北海道立文学館に勤め始めた。任期つきの勤務であったが、「藤倉孝幸展」などの展覧会を持った。

文学館に2年間勤めた後、平成二三（二〇一）年、有島記念館に移った。現在は田能村元仁さんと館の学芸業務を行っている。

伊藤さんは、現在、ニセコ町教育委員会が有島記念館の係長と、主任学芸員を兼任している。前者の事務、後者の学芸という、相反する仕事を抱えている。仕事の八割は予算や作



ブックカフェでコーヒーを飲みながら語る伊藤さん

品の折衝など事務に関わる部分だが、良い面もあるという。「自分で企画展などの事業を考えながら、お金のことも持てるのは、ある意味すべての分野を掌握できる」と伊藤さんは前向きだ。自分の言葉で議会に説明できる強みを活かして活動している。

ただ一方で葛藤もある。人の生死に関わらない博物館の活動にどれだけ予算をつけてよいのか、日々せめぎ合いだという。

伊藤さんが有島記念館に来てから、明確に打ち出したのが「若手芸術家の振興」という考え方だ。コンサートでは若手の演奏家を招き、美術展では若手の美術家を紹介。中高生を対象とした公募展で、若手芸術家の発掘も行っている。これは、若手の芸術家を支えるという有島武郎の志を継いだものである。例えば、有島は、小説『生まれ出づる悩み』のモデルになった岩内の画家・木田金次郎という若い作家を世に出そうとした。東京で展覧会を開催してお金を集めて、画材費を贈るなどの支援をしていた。

「個人の名を関した記念館の使命は、個人のやりたかったことや、志したことを後の世に具現化していくこと」と伊藤さんの理念は明快だ。有島の志が記念館の普及事業の基本的な考え方となっている。

有島記念館の成り立ちと役割

次に、伊藤さんが勤める有島記念館が、ニセコという地域において果たしてきた役割について、その成り立ちと共に振り返ってみたい。ニセコという観光のイメージが強い有島記念館もまた、観光の中で役割を果たしてきた側面がある。

有島記念館の歩み

1949(昭和 24)年	農地改革により、有島農場が解散。旧場主の恩に報いるために有島謝恩会が設立され、旧農場事務所で有島武郎や旧農場の資料を保存・展示。
1957(昭和 32)年	記念館が焼失。収蔵品の殆どは無事搬出された。
1963(昭和 38)年	謝恩会を中心に再建運動がおこり、募金により、1階がレンガ造、2階が木造の有島記念館を再建。
1978(昭和 53)年	管理上の問題や会館の老朽化に伴い、有島武郎生誕百年を記念して、ニセコ町が町立の施設として、現在の常設展示室と呼ばれている部分を建てる。
1989(平成元)年	講堂や事務所などを増築。
1995(平成 7)年	アートホールなどを増築。

もともと有島記念館は、旧有島農場の小作人の子孫によって作られた謝恩会による民営施設であった。昭和五三（一九七二）年、ニセコ町が常設展示室を建設し、町立の施設として再スタートした。

当時、記念館は博物館としては認識されておらず、観光施設としての側面が強かった。まだ高橋牧場や道の駅などの現在の観光名所もなく、トイレ休憩の場所として大型バスが訪れた。多い時では年間4万人以上が足を運んだという。現在も観光客の利用は多いが、団体バスで来る人よりは、記念館に興味のある個人客へと変化している。

地域住民の利用

ところで、有島記念館を利用しているのは観光客だけではない。地元の人々も記念館を利用している。コンサートなどの普及事業は半分が町民の方だという。ちなみに、文化ホールとしての機能は、有島記念館が重視する4つの機能（文学館・美術館・郷土博物館・文化ホール）のうちのひとつだ。

また、町民の利用が多いというのが平成二七（二〇一五）年に館内に開業したブックカフェ。アートホールから羊蹄山を眺めながらゆったりとコーヒーと読書を楽しめる。利益よりも、記念館を盛り上げたいという町内の「高野珈琲店」の協力で実現した。ドリンクが割引になる年間パスは、2回来れば元が取れ、コンサートも聞き放題と町民に人気だ。

記念館が重視している機能

- ①文学館機能：常設展示を中心に文字活字文化向上に寄与。絵本作家・かこさとしさんの展覧会など。
- ②美術館機能：藤倉英幸さんの作品を中心に展示。有島武郎青少年公募絵画展など。
- ③郷土博物館機能：ニセコ町に関する郷土資料の収集、町内遺跡の再評価など。
- ④文化ホール機能：各種コンサートや講演会を開催。若手演奏家によるコンサートや、若手芸術家を主体としたアート教室など。

さて、ここからは地域における学芸員の役割を考えてみたい。学芸員の仕事と言うと何を思い浮かべるだろうか。資料を集めて未来に継承すること（収集・保存）、資料の価値を明らかにすること（調査・研究）、資料の価値を伝えること（展示・教育普及）など、学芸員の仕事は資料に関連する。有島記念館でも、文学資料や絵画資料、そして郷土資料に関わる活動が行われている。この郷土資料の収集などの、有島記念館の郷土博物館機能に焦点を当ててみたい。

五〇年後を見据えた資料の収集

有島記念館では開館以来、ニセコ町に関する郷土資料の収集を目的の一つに掲げてきた。後世の人々にニセコ町の生活の様子を知ってもらえるようにするためだ。

伊藤さんは資料の収集の際、五〇年後を意識しているという。今は価値のないリーフレットでも、後の世に価値が見出される可能性がある。例えば、昭和二五（一九五〇）年にニセコ町が作成した観光リーフレットの表紙には吉田初三郎作の鳥観図が描かれていた。後世に吉田初三郎の絵が評価されたことで、リーフレットの価値も高まった。

「紙の資料は意識的に収集しないと捨てられてしまう」と、残りづらいものを優先的に収集する方針だ。また、資料収集の際には付属資料も含めて収集するという。例えば、老朽化のために引退した「ニセコエクスプレス」を、令和元（二〇一九）年に郷土資料として購入。ニセコ町鉄道文化協会が主体となつてクラウドファンディングで資金を集めた。その時、伊藤さんがJRに強く求めたのは「図面」の提供だ。ニセコエクスプレスは賞を取るほどデザイン性も評価されており、

図面も立派な資料となる。「車両だけでは産業遺産としての価値が判断できない」と、千枚近くの図面を集めている。これは将来の学芸員のためでもある。資料に関する情報が残っていることで、資料を収集した本人以外にもその価値を評価できるようにという配慮だ。

こうした資料の収集を、伊藤さんは「基礎体力」と表現する。町民や来館者からは見えないバックヤードでの作業であるが、それが今後の展示や普及事業の貯えとなる。

現在集めている地域の人々からの聞き書きも、今後郷土資料になりうるものである。企画展が開催されたり、出版されたりするまでは、日の目を見る事がなくても、資料の収集は重要な博物館の活動である。

地域の遺構・遺産の見学会

週末を中心に開催される講演会や見学会も郷土博物館としての活動の一つ。

平成二八（二〇一六）年には、文化財ツアー「西富遺跡見学会」を開催。西富遺跡は手の付いていない北海道で一番状態のいいストーンサークルだ。遺跡の発掘調査を行った高倉純さん（北海道大学埋蔵文化財調査センター）と鈴木建治さん（北海道大学文学研究

院)を講師として招いた。参加者を町民に限定しているわけではないが、「地元でそういうものがあると知ってもらう機会を提供しているという意味では町民向けの講座」だという。「ニセコはアウトドアの観光が主だが、実は文化的なものも結構ある。地元の人に知ってもらわないと町外の人にも魅力が伝わらない」と町民にその魅力を発信している。このように多様な郷土博物館活動が行われている中、軸となる信念は何だろうか。「基本的には将来のことを考えている」という。調査・研究により、収集した資料の価値を高める。それが地域住民の財産となり、展示や普及事業によって、その価値を理解してもらう。地域における学芸員の役割が見えてきた。

鉄道遺産による町おこし

今後の活動について、伊藤さんに展望をうかがった。「ニセコ鉄道遺産群」の振興が命題だという。鉄道遺産群がある中央地区は、鉄道を敷く時に計画的に作られた地区。現在のニセコ駅があるのもこの地区だ。昭和三〇年代の鉄道輸送が中心だった頃には活気があった。しかし、鉄道が使われなくなるにつれて中央地区も廃れていった。



「旧新得機関区転車台」と「殖民軌道真狩線跡」



「9600形9643号蒸気機関車」

ニセコ町鉄道遺産

現在のニセコ駅のすぐ側に位置する。近くには、「中央倉庫群」や「旧でんぷん工場」などの産業遺産がある。

「そこに鉄道遺産群があることで、町民の方にも、鉄道と共に開け栄えた場所があったと再認識してほしい」と、鉄道遺産への期待は大きい。小学生の町づくり委員会に解説をするなど、学びの場として活用されている。ニセコ駅の側にある鉄道遺産群には、クラウドファンディングで購入したニセコエクスプレスが今年度中に到着する予定だ。月に二回、転車台と共に動かす計画だという。「鉄道愛好家だけでなくニセコ町民にも知ってもらいたい」と伊藤さんは思いを口にした。各地から愛好家が集まることで、地元の人にも注目してもらう「仕掛け」だ。こうした鉄道遺産群の取り組みからは、「町づくり」への貢献という学芸員の役割が見えてくる。「今の町づくりにも貢献するし、将来の資料の価値向上にも貢献したい」と伊藤さんの目線は現在と未来の地域へと向けられている。学芸員は展示や研究をする仕事というイメージが強いが、地域の活性化という形で地域社会に貢献することもできる。有島記念館における伊藤さんの活動から教えられた。資料という地域の財産を収集し、それを現在あるいは未来の地域住民のために保存・活用すること、それが学芸員の仕事なのだ。